歴史総合-DX

**1918年②（大正7）大正中期の学校教育**

1918年（大正7）には欧州で大流行が始まったスペイン風邪が日本で猛威をふるいはじめ、その後の3年間に全国で約45万人が病死する厳しい時代が続くこととなった。日露戦争後のベビーブーム世代が学齢期に達し、学校教育への国家関与は露骨になり、戦争4年目の1918年（大正7）に国定教科書が大幅に改訂され、「修身」の教科書では、日清戦争時に死んでも進軍ラッパを手放さなかった木口小平の勇気を教え、 日露戦争時に天皇のために立派に戦えと岸壁で叫んで息子を戦地に送った母の逸話「一太郎やあい」が登場した。文部省（現・文部科学省）主導の教育説話・小学唱歌に反発した童話作家の鈴木三重吉は、児童文芸雑誌「赤い鳥」を創刊、詩人の北原白秋も参加して「赤い鳥運動」が始まった。また、欧州の総力戦でその代替需要の戦争景気は、高等教育を受けた人材不足を深刻化させ、人手不足を補うため、同年（1918）には「大学令」が公布されて、北海道には札幌農学校を源流とする北海道帝国大学（現・北海道大学）が創立され、早稲田大学、慶応義塾大学部が日本初の「大学令」による私立大学として正式認可され、早稲田大学は新たに大学院を設置、従来の高等予科に代え早稲田高等学院を創立、慶応義塾大学は医学部を新設するとともに、大学病院 （現・慶応病院）を開設した。その12月には「高等学校令」も改正され、従来の東京の「一高」、仙台の「二高」、 京都の「三高」、金沢の「四高」、熊本の「五高」、岡山の「六高」、鹿児島の「七高」、名古屋の「八高」のナンバースクールに加え、各県に新設高校（戦前の旧制高校、戦後の大学1・2年）が認可されることとなり、弘前高等学校（青森）、富山高等学校（富山）、松本高等学校（長野）、 水戸高等学校（茨城）、松江高等学校（島根）、佐賀高等学校（佐賀）などの官立旧制高校、私学では東京に成城高等学校（現・成城大学）、成蹊高等学校（現・成蹊大学）、武蔵高等学校（現・武蔵大学）、神戸に甲南高等学校（現・ 甲南大学）が創立した。翌1919年（大正8）には島崎藤村・若山牧水・志賀直哉・西条八 十・竹久夢二・有島生稲らが参集し、詩人の野口雨情を編集長とする童謡童話雑誌「金の船」（後の「金の星」）が金の星社から創刊し、「大正ロマン」の時代を招来することとなった。